

原著論文

『懐風藻』元日の詩

要旨

日本最古の漢詩集である『懐風藻』には、「元日」の題を持つ詩として、藤原不比等と長屋王の作品が載せられている。また、その二首に加えて、大伴旅人の「初春侍宴」という詩も、同じく元日の作として認めよう。しかし、いずれの詩も、制作された年代や情況などは明らかでなかった。そこで、改めて詩の内容を検討して、作者の置かれた立場や、同時代の史書『続日本紀』などを探ってみると、不比等と旅人の詩が和銅三年正月、長屋王の詩が同八年正月に作られたと判断できる。これらの詩は、官人のみならず、異族とされる隼人や蝦夷の人々をも交えて盛大に催された元日の宴において詠じられたものであり、その場の雰囲気や宴の変化の様相などを窺わせる貴重な作品群として評価できるだろう。

キーワード 藤原不比等の詩「元日」、長屋王の詩「元日宴」、大伴旅人の詩「初春侍宴」

はじめに

日本最古の漢詩集である『懐風藻』には、「元日」と題する詩として、二首の作品が載せられている。藤原不比等と長屋王の詩である。また、これに近い内容の詩として、「春日」「春苑」「春日侍宴」などの題を持つ作品も目につくが、これらは「元日」詩とは別の時日に作られたもの

らしい。同時代の史書『続日本紀』の記載によれば、春の宴は、元日よりも日を経た後に催されるものであり、これらを「元日」詩と同列に扱うことはためらわれる。しかし、なかには「初春侍宴」と題しながらも「元日」の作と思われる大伴旅人の詩も存在している。そこで、この詩を含めて、「元日」詩がどのような情況のもとで作られ、如何なる内容を有していたのかを考察してみることにはしたい。

一

『懐風藻』のなかで「元日」と題された詩として、最初に挙げられるのは、藤原不比等の作品である。その制作の年代などは明らかではないが、まずは詩の内容から確認していこう。

五言。元日。応詔。一首。藤原朝臣史。

29 正朝観万国。元日臨兆民。

齊政敷玄造。撫機御紫宸。

年華已非故。淑氣亦惟新。

鮮雲秀五彩。麗景耀三春。

濟濟周行士。穆穆我朝人。

感徳遊天沢。飲和惟聖塵。

全体的に、新年を迎えて清新の気が満ちる中、参集した人々と喜びを

共にする心意を詠みこんだ雰囲気の詩であるが、従来の詩の解釈には訂正を要する箇所がある。まず初句冒頭の「正朝」だが、これを二句目の「元日」と同意にとる向きが多い^①。しかし、韻文において、意味を同じくする語を重ね用いることは、よほど特殊な場合か、拙劣な作である以外には、普通はなされないはずのものと思はれる。ここは杉本行夫註釈『懷風藻』に説く「元日天子正殿に出御ありて群臣の朝賀を受け給ふをいふ」という釈を見直して再発進すべきだろう。

同時代史料である『続日本紀』正月の朔を見ていくと、しばしば「天皇御大極殿受朝」、あるいは「廢朝」の語句が記されている。この「正朝」は、いわば史書のいう「受朝」に当たると考えられ、漢語の出典の是非に拘泥することなく、「廢朝」ならざる正規に儀式の行なわれた事態を示している語と解する方が、文脈の上からも、時代情況の有様からも、より適切ではないかと思われる。

同じようなことは、九句目の「済済周行士」と十句目の「穆穆我朝人」についても言い得る。この両句も、近い意味を持った語句と見なし、たとえば「周の朝廷のやうに衆くして盛んな我が朝廷の官列に在る人々は和敬して言語容止が美しく盛んである^③」とか、「朝廷には、立派な役人が沢山をつて、天子の御聖業を輔翼し奉らうとする^④」とか、「ここには数多のうるわしく威儀のある群臣が満ち集る^⑤」などといった、二句をつなげた形の口語訳がなされがちである。たしかに、諸注釈書が説く通り、この部分は『詩経』中の詩の語句が出典なのだろうが、「済済」や「穆穆」、それに「我朝人」の語に限っては、諸注の間ではほとんど異見がみられない。問題は「周行士」の語にあるのだろう。『詩経』中に現れる「周行」の語は、中国でもさまざまな注解が施されており、どの解が、この「元日」詩の「周行」の語の訳として相応しいのか、判断に苦しむところである。概して諸注釈書は、「周の朝廷の列位^⑥」の意として受けとめているようである。その「周の朝廷」が、そのまま「我朝」の語に通じると考えるが故に、右のような口語訳になるのであろう。しかし、

この両句についても、意味の重複はないと私はみる。「周行」の「周」と「我朝」の「我」とが対比され、それが比喩の形をとって連繫すると釈するのは当たるとまい。数ある語解の中で、「周行」には「至れる道」「最上の道^⑦」という解もあり、たとえば『詩経』小雅の「鹿鳴」詩の句にある

人之好我 示我周行

の「周行」はこの解に近く、境武男『詩経全釈』では、この詩を「客人が善道を示すという儀礼の語」と説明している^⑧。つまり、「周行士」は「我朝人」とは別人と考えるべきなのではないだろうか。すなわち、ここには別種の人たちが一場に会しているということを言わんとしているのだろう。その別人同士が、十一句、十二句で「感德遊天沢。飲和惟聖塵」と結んだ形で新年を寿いでいるのが、この「元日」の詩の趣旨なのである。となれば、初句目、二句目の「万国」や「兆民」というのも、「臣民^⑨」とか「多くの民」などの意で一括りには扱えない語だということが了解されよう。句間には複雑な人々のうごめきが蔵されている。そういう背景を持った詩なのである。

それでは、この詩はいつどのような事情のもとで作られたものなのだろうか。およそ『懷風藻』の詩の配列が、目録に述べる如く「略以時代相次。不以尊卑等級」という方針であったとすれば、かの大宝二年（七〇二）春に催された大々的な詩宴に藤原不比等の名が見えない点から、この藤原不比等の「元日」の詩が作られたのは、少なくとも大宝二年より下ることがわかる。また「応詔」の詩であることから、この詩は天皇臨席のもとで、おそらく諸臣を代表する形で詠まれたに相違なく、そうであれば藤原不比等の官職がそれに相応しい地位を占めていた時期とみるべきだろう。

藤原不比等は、大宝元年（七〇一）三月、正三位大納言に就いていたが、同四年（慶雲元年）正月七日には従二位に昇進し、同月十一日には封戸八百戸を給せられ、慶雲四年（七〇七）四月には、与えら

れた食封五千戸のうち二千戸のみを受け、さらにその翌年(和銅元年)の正月には正二位、三月には右大臣へと昇進する。その上には石上朝臣麻呂が左大臣でいたが、この時点で麻呂はすでに七十歳を越えており、実質的には五十二歳の藤原不比等が台閣の首班に立ったといっても過言ではない。そして和銅の年は、元年から平城京遷都の動きが始まり、同二年の末には「車駕幸平城宮」という記事が見えるほどに造営が進んだ。

この間、すなわち大宝三年から和銅二年の間の元日に天皇が大極殿に御して、朝を受けたのは『続日本紀』の記載でみる限り、大宝四年(慶雲元年)と慶雲三年の正月の二回だけであり、藤原不比等はまだ大臣の位に昇っていない。和銅二年は災疫が続き、北では蝦夷の叛乱が頻発していた。明けて同三年の正月朔に、三年ぶりに「天皇御大極殿受朝」が実現する。この年の三月十日に「始遷都于平城」となるわけだが、この時に左大臣正二位石上朝臣麻呂は、旧都に留守となっている。石上麻呂は藤原不比等のライバルであったとも、政治的に二人のあいだで葛藤のようなものがあったとも言われている。

それはさておき、和銅三年正月朔の「受朝」こそ、遷都を間近に控えて、官位も昇りつめた右大臣の藤原不比等にとって「元日」の詩を作るに相応しい時日であった。というのも、その後、正月朔の「受朝」は、和銅八年(靈龜元年)まで行なわれていないからである。もし仮に、藤原不比等の「元日」の詩が、この和銅八年正月まで下るとすると、彼が他に遺した四首の詩がすべて晩年の五年間(藤原不比等の没年は養老四年)に集中して作られたことになり、如何にも不自然にならざるを得ないだろう。

ところで、和銅三年(七一〇)春正月壬子朔の『続日本紀』の記事には、「天皇御大極殿受朝」の後に次のような記載が続いている。

隼人蝦夷等亦在列。左將軍正五位上大伴宿祢旅人。副將軍從五位下穗積朝臣老。右將軍正五位下佐伯宿祢石湯。副將軍從五位下小

野朝臣馬養等。於皇城門外朱雀路東西。分頭陳列騎兵。引隼人蝦夷等而進。

この年の「受朝」には、異族と認識されていた隼人・蝦夷の群も参列していたのであり、それを引率していたのが大伴旅人や佐伯石湯だったというのである。ちなみに佐伯石湯は、前年に蝦夷が叛乱を起こした際に征蝦夷將軍として遣わされた人物である。また同じく前年の冬には、薩摩隼人郡司以下百八十八人が入朝したので、諸国の騎兵五百人を呼び寄せて威儀に備えたという記事も見出せる。和銅三年の正月は、遷都を間近に控えて、宮廷のみならず人々も緊張と興奮に包まれていた情景が窺えるのである。

そうした事情を考慮して、改めて藤原不比等の「元日」の詩を見てみるならば、「万国」や「兆民」の意味するところも、「周行士」や「我朝人」の意味するところも、また「感徳遊天沢。飲和惟聖塵」の具体的な様子も、おのずから理解できるのではないだろうか。然り。隼人も蝦夷も含めた客人こそが「周行士」であり、かの地をも併じたものが「万国」であり、かの地の住人をも呑み込んだものが「兆民」だったのである。藤原不比等は、律令国家の範囲の及ぶ外の民までも宮廷に招じ入れ行われた遷都まぎわの元日の祝典を、右大臣という立場で、いわば女性の天皇を代弁する形で詠じて前途を寿いだのだろう。それが、この「元日」の詩だったと考えられるのである。

二

ここで、藤原不比等の「元日」の詩に関連して、是非とも考えてみなければならぬ詩が二首ほど挙げられる。それは長屋王の「元日宴。応詔」の詩と、大伴宿祢旅人の「初春侍宴」の詩である。まずは長屋王の「元日宴」の詩から検討していこう。

五言。元日宴。応詔。一首。長屋王。
67 年光泛仙籟。 月色照上春。

玄圃梅已故。 紫庭桃欲新。

柳糸入歌曲。 蘭香染舞巾。

於焉三元節。 共悦望雲仁。

この詩は、「元日宴」とあるように、藤原不比等の詩といわば同題であり、しかも韻まで共通している。さらに「応詔」であることも合致している点を見ると、藤原不比等のものと同じ時日に作られた詩である可能性が高いように思われる。

ところで、「応詔」の詩は、『懷風藻』においては、この長屋王の詩が最末尾となっており、それ以後は姿を見せなくなる。もし長屋王が、自身の上昇していく地位に歩調を合わせて、天皇臨席の場で詩宴の機会を設けていたとすれば、それ以降も「応詔」の詩は続いたのかもしれないが、実際にはそうはならず、彼が独自で催した長屋王詩苑と呼ばれる作詩の場が展開していくことになる。とすると、この「元日宴」の詩は、いわば藤原不比等の詩苑に連なる作品とみてよいのではあるまいか。

もし、この詩が和銅三年正月元日の作であるとすれば、時に長屋王は正四位上宮内卿の職にあった。年齢は二、三十歳台であり、当時すでに五十歳台の藤原不比等と比べると、あまりにも年の差は大きい。当然そうした世代差は、作詩の上での工夫などにも影響を与えただろう。しかし、長屋王の詩は一読して同じ時日の作とは思いに感じに打たれる。そもそも『懷風藻』において、同時日に作られた詩には、類似性がある。色濃く見られる傾向がある。それは、当時の作詩の場というものが、そのような条件を醸し出していたことと無縁でないからである。たとい一年のうちで特定の日に催される行事の場であったとしても、作者の置かれた環境や、参集した人々の顔ぶれや、当日の気候や雰囲気などが異なっておれば、同題の詩であろうとも、内容に微妙な違いの影が漂うことに

なり、別次元の作と認めなければならぬだろう。こうした問題については、後述する大伴旅人の詩のところでまた触れることにしたい。

長屋王の「元日宴」の詩は、新年の清らかな気や光の中に点景する風物や会場をにぎわした歌舞の様子が描写されている。若き長屋王の、如何にも夢を前途に抱き持つかのような息吹が伝わってきて、年始の喜びを祝う気概がよく表れている。しかし、この詩には、儀式や宴に参加したはずの蝦夷や隼人を意識するニュアンスが、なぜか乏しいように感じられる。これは、年若い長屋王の度量、あるいは視野の範囲などに関わる個人的な特徴にすぎないものだろうか。それに反して、この詩には「梅」「桃」「柳」「蘭」などが詠み込まれており、事実がこの通りの光景であったのか疑問が持たれるところだが、これらの語がすべて年明けとともに兆しの環境にあったことを先駆けて詠んだのだと見なせば、虚実相通ずるものとして許されよう。

ただ、元日の宴というものが、『続日本紀』の記載による和銅三年正月にだけ見出され、それ以後には全く催されなかったのかと言えば、必ずしもそうではない。年はやや距たるが、藤原不比等が存命中の時期、二回の「受朝」が行われている。まずは、和銅八年（靈龜元年）正月である。

靈龜元年春正月甲申朔。天皇御大極殿受朝。皇太子始加礼服拜朝。陸奥出羽蝦夷并南島奄美。夜久。度感。信覚。球美等来朝。各貢方物。其儀。朱雀門左右。陣列鼓吹騎兵。元会之日。用鉦鼓自是始矣。

是日。東方慶雲見。遠江国献白狐。丹波国献白雉。

また、その五年後の養老四年（七二〇）の正月にも、「受朝」という語こそ見えないが、元日の宴が催されていたことがわかる。

四年春正月甲寅朔。大宰府献白鳩。宴親王及近臣於殿上。極飲而罷。賜物有差。

これらの記事は、どちらも正月朔に催された宴に関するものであり、長屋王が「元日宴」の詩を作った場に該当する可能性がある。もちろん、元日の記事が残されなかった年に、こうした宴が催されていたことも想像されるが、ひとまず今は『続日本紀』の記載に依って考えていくことにする。

藤原不比等の「元日」詩が、当時の彼が占めていた地位も関与したものとすれば、この長屋王の「元日宴」についても、その辺の事情を考慮しなければならぬだろう。長屋王は、没年齢が五十四歳とも四十六歳とも伝えられ、両説が並列して論じられたまま、未だに決着していないのが現状である^⑤。したがって生年も確定できず、ある官職に就いたのが何歳なのかも微妙に関係してくるので悩まされるところだが、長屋王の名が史料に初めて現れるのは大宝四年（慶雲元年）正月七日で、この時に無位からいきなり正四位上に叙せられている。その五年後の和銅二年（七〇九）十一月には従三位になり、同時に宮内卿にも任官している。この異例の昇進ぶりには、背後にさまざまな政治的事情があったとみられるが、今はその問題には触れない。さらに奇異に映るのは、宮内卿だったのはわずか数ヶ月で、翌三年四月には式部卿に任じられていることである。式部卿という職は、当時においては重要な地位であり、長屋王は在任した八年間のあいだに官人制度の改革にも携わったという^⑥。霊龜二年（七一六）正月、正三位に昇叙。養老二年（七一八）三月には大納言となっている。

今、この「元日宴」の詩が作られた時日を、和銅三年・和銅八年・養老四年のいずれかと仮定して、その時期の長屋王の地位を調べてみると、それぞれ従三位宮内卿・従三位式部卿・正三位大納言となる。いずれの時期を採っても、藤原不比等はまだ在世中であり、長屋王は当初は藤原

不比等の詩苑の渦中の一員であったと想像される。この「元日宴」の詩は、そのことを証する記念作とも称することができるのである。

右の三つの時日の中では、長屋王の立場などから考えて、大納言の地位に就いていた養老四年正月こそが最適のように思われるが、この年の宴が該当する可能性は低いだろう。なぜならば、長屋王が自身の邸宅でしきりに催して遣された、彼の「於宝宅宴新羅客」の詩（この詩は「元日宴」の詩の次に掲載されている）は、それに続く諸人の「秋日於長宅宴新羅客」の詩群とともに、養老三年（七一九）秋の作であろうと小島憲之によって指摘されているからである^⑦。『懷風藻』における詩の配列の原則による限り、長屋王の「元日宴」の詩は、養老三年正月よりも以前の作ということになる。

それでは、和銅三年・和銅八年のどちらだろうか。前者の和銅三年正月は、長屋王が宮内卿に任官して間もない時期である。果してこの地位で、藤原不比等の詩を継ぐように並んで元日を寿ぐ詩を詠するような情況にあったのか疑問である。この詩が内容的にも藤原不比等の詩とややそぐわない響きを奏でていることは前述した通りである。では、後者の和銅八年正月はどうだろうか。長屋王は、式部卿という重要な地位に就いており、さらには親王に准じる待遇をも受けていた。『続日本紀』和銅七年正月三日の記事には、次のような記述がある。

七年春正月壬戌。二品長親王。舍人親王。新田部親王。三品志貴親王益封各二百戸。従三位長屋王一百戸。封租全給。其食封田租全給封主。自此始矣。

これは、長屋王を含めた五人の皇族に、封戸の増加と租の全給が認められたことを記したものである。普通ならば封戸からの租の取り分は半分なのに、例外的に租を全給すると定められている。長屋王は、親王の子という身分でありながら、他の四人の親王と同列の扱いを受けている

のである。長屋王のこのような特殊性が何に起因するのかは、他日の追究に譲るとして、長屋王の立場は、和銅八年正月になると、「元日宴」の詩を詠むに値する地位に近づいたと言えるのではあるまいか。加えて、大学寮などを下部組織に持つ式部省の長官に任じられて、多くの学識者を束ねる立場にあったことも加味すれば、晴れの場における詠詩は、宮内卿だった時代よりも一層自然な行為であったことだろう。

前掲『続日本紀』から、和銅三年正月と和銅八年正月の記事に再び目を向けてみよう。どちらも異族とされる人々が参列する元日の儀式である点は類似しており、裏を返せば、「元日」の詩はこのような儀式の場で作られる性格のものだったのかもしれない。

和銅八年正月の場合、儀式に先だつ和銅七年十一月に、左右の將軍や副將軍が任命され、左將軍には大伴旅人が再任されている。同年十二月には南島奄美信覚および球美などの島の人五十二人がやってきたという旨の記載があり、これは和銅三年の正月とも似た情況といえる。だが、和銅八年元日の儀の記事には「朱雀門左右。陣列鼓吹騎兵。元会之日。用鉦鼓自是始矣」とあるように、朱雀門の左右に騎兵が並んで、つづみを打ち鳴らしたり笛を吹いたりして、現在でいうアトラクションのような光景が展開されたのである。また、「鉦鼓」が初めて用いられて、華々しく催されたことも記されている。¹⁸この賑やかな演出で生まれた明るさや陽気さは、おそらくそのまま宴の雰囲気へと繋がっていったことであろう。長屋王の「元日宴」の詩に登場する「柳糸入歌曲。蘭香染舞巾」という句は、この様子を描いた表現なのではないだろうか。さらに想像をたくましくするならば、和銅三年元日の儀とほぼ同じような形式で行われたこの度の宴において、新たな趣向を凝らすべく図ったのは、他ならぬ長屋王その人だったのではなかったろうか。以上のように、長屋王の「元日宴」の詩は、和銅八年正月に制作された作品であったと推定されるのである。

三

もう一首、これらの「元日」の詩と関連して触れておくべき作品として、大伴旅人の「初春侍宴」の詩が挙げられる。

五言。初春侍宴。一首。大伴宿祢旅人。

44 寛政情既遠。 迪古道惟新。

穆穆四門客。 濟濟三徳人。

梅雪乱残岸。 煙霞接早春。

共遊聖主沢。 同賀擊壤仁。

この詩は、「初春侍宴」と題しているので、果して元日の詩であったかどうかは確かめられない。しかし、一読して明らかのように、三句から四句目の「穆穆四門客。濟濟三徳人」や、七句目の「共遊聖主沢」などは、藤原不比等の「元日」詩における「濟濟周行士。穆穆我朝人。感徳遊天沢」という句と酷似している。ただ、詩の一部に難解な箇所があり、全体の意には影響しないが、論議を呼んでいる。その箇所とは、五句目「梅雪乱残岸」の「残岸」という部分である。この語の用例が、初唐以前の漢籍に見当たらないため、諸注釈書も解釈に苦しんでおり、この語をめぐる詳しい論考も発表されている。¹⁹しかし詰まるどころ、これを「崩れた岸」という意に解して、「花にかかる雪は崩れた岸に乱れ散り²⁰」という訳に落ち着いているようである。だが、素直に考えてみれば、めでたい宮内を思わせる初春の宴の詩句に「崩れた岸」を意味する語が平然と使用されるということがあり得るのだろうか。これまでの解釈は、五句目と六句目が対をなすと見て、「残岸」と「早春」が相対していると考えているのだろうか。しかし、それはこの詩の出来を過大に評価しての所為というべきだろう。そうではなく、この詩には拙劣さが露呈しており、作者の大伴旅人は五句目を「梅のごとき雪が池の岸辺に乱れ残っている」と詠もうとしたのではないか。ただ、今は春なので「霽や

霞が早春の空にたなびいている」と続けようと意図したものではないかと私は解釈する。この両句は、いわば大伴旅人が身を置いた場についての叙述で、この部分を除くと、他は藤原不比等の詩句ときわめてよく似ている。それは、この詩の持つ特殊性を雄弁に物語っているだろう。詩句の類似が、同じ時日の作である可能性を示すことはすでに述べた。そうであれば、この「初春侍宴」の詩は、和銅三年元日の作品と考えられる。

そこで、改めて当日の儀の模様を振り返ってみると、左將軍だった大伴旅人は、副將軍らと共に、隼人蝦夷らを率いて参列したとみられる。

於皇城門外朱雀路東西。分頭陳列騎兵。引隼人蝦夷等而進。

大伴旅人と異族との関係を史的に探り考えると、彼が率いたのは蝦夷ではなく、隼人の方の一群だったと思われるのであるが、異族を取り締まる將軍の長として活躍したのであれば、この詩はそれらの人々と関係するものであった可能性が生まれてくる。

だが、そのような推定をする前に、次の『続日本紀』和銅三年正月十六日の記事にも注意を払っておかなければなるまい。

丁卯。天皇御重閣門。賜宴文武百官并隼人蝦夷。奏諸方樂。從五位已上賜衣一襲。隼人蝦夷等亦授位賜祿。各有差。

これによると、元日の儀より半月ほど遅れて、改めて宴が催されていることが確認できる。大伴旅人の詩題が「初春侍宴」である点からすれば、彼の詩はあるいは、この時の作ではないかという推測も可能である。この宴に大伴旅人が参加していたのか否かは全く不明だが、場の情況そのものは似ている。だが、果して藤原不比等の「元日」詩と同じ趣の語句を用いた詩が、その十数日後に再び大伴旅人の手によって作られ、披

露されるなどということがあり得るのだろうか。しかも、この宴には隼人蝦夷だけではなく、天皇が臨席して文武百官も列席していたのである。まず起こりえない事態のように思われる。何より、このような席で詩が奏されたとするならば、「応詔」の詩も詠まれたはずである。詩句の類似性を手がかりに「応詔」の詩を探ると、この大伴旅人の詩と似通った作品としては、藤原不比等の「元日」詩があるのみで、他には見当たらない。むしろ、この正月十六日の宴の詩としては、同じ藤原不比等の作になる「春日侍宴。応詔」詩の方が相応しいように思われる。ただし、この点の検討についても他日に論ずることにしたい。

それでは、大伴旅人による和銅三年正月朔の「初春侍宴」が、藤原不比等の「元日」詩と限りなく類似しているのは何故だろうか。またその詩は、どういう発表の形をとったのであろうか。以下、憶測を試みてみたい。

大伴旅人は元日、隼人蝦夷らの群を率いて儀式に参列した。そして藤原不比等の詩によれば、その儀式の後には宴が催されたと考えられる。異族を引率する將軍の長であったならば、大伴旅人の役目は宴においても解除されることなく、引き続き継承されたことだろう。いわば、監視・監督の役の如き存在として、宴に同席するか控えるかしていたであろう。しかし、その宴の形態も、すべての列席者が今日のように同卓同席で催されたなどということはありません、官位に差があるのと同様に、それぞれ席にも異同があったことは十分に了解されることだろう。会場は同じであっても、隼人蝦夷の一同には別の席が設けられたとすれば、監督の長たる大伴旅人は、当然そちらの席の近くに陣取るといった状況が想定されなければならない。その席は、上席にいる右大臣の藤原不比等からは距離をおいた位置であったに違いない。なおかつ、その席は、近くに池がある場所に設けられたのではなかったか。「残岸」の語は、そうした事情を語っているのであろう。ここに、この詩の生まれる条件があったと考えられる。同じ日の作でありながら、この詩は「初春」と題する

のみで「元日」を称さず、また「応詔」の形式にもなっていない。これは、単に大伴旅人の慎ましきさによるのではなく、このような背景があつての処遇なのかもしれない。異族の人々に向かつて、改めて二段構えの元日詩を披瀝する必要が生じたと考えれば、大伴旅人が藤原不比等の詩の語句を真似た詩を復唱するということも、多分にあり得た話なのではないだろうか。また、自分たちを誘導してくれた將軍の長こそ、隼人蝦夷にとっては偉大な存在だったに相違ない。その長が詠じた詩は、かくして元日の宴のなかで印象づけられて、記録に書き残される価値が生まれたのではあるまいか。

当詩が詠まれた背景として、以上のような事情を想定するのである。

おわりに

奈良朝における藤原氏の優位は、ある意味では皇族をも凌ぐものだった。長屋王は、神龜六年（天平元年）二月、変を起こしたとかで藤原氏に抹殺されたと説かれるが、少なくとも藤原不比等の在世中には、両者の間に表立った対立はなかった。むしろ長屋王は、詩の世界においては藤原不比等の後継者であつたらしいことは「元日宴」の詩の存在によって十分に窺える。一方、大伴氏は絶えず藤原氏の風下に立たされておろ、それがいわば氏をして『万葉集』の編纂へと駆り立てたということも、世上よく言われている事柄である。こうした情況が、政治の舞台における優劣の結果だったとするならば、その政治に密着して展開した漢詩の世界は、その色合いを如実に反映してははずである。いみじくも「元日」をめぐる三首の詩は、この有様をくっきりと後世のわれわれに語り示した作品群として評価できるのではないだろうか。

註

(1) 枳清潭『懷風藻新釈』、大野保『懷風藻の研究』（三省堂、一九五七年）、林古溪『懷風藻新註』（明治書院、一九五八年）、小島憲之校注『懷風藻 文華秀

麗集 本朝文粹』日本古典文学大系69（岩波書店、一九六四年）、江口孝夫全訳『懷風藻』（講談社、二〇〇〇年）などが挙げられる。

(2) 杉本行夫『懷風藻』（弘文堂書房、一九四三年）八二頁。

(3) 註(2) 杉本行夫前掲書、八二―八三頁。

(4) 註(1) 林古溪前掲書、八九頁。

(5) 註(1) 小島憲之前掲書、九九頁。

(6) 諸橋徹次『大漢和辞典』卷二の項。

(7) 註(6) 前掲書。

(8) 境武男『詩経全釈』（汲古書院、一九八四年）三八六頁。傍点は引用者による。

(9) 註(4) 前掲書。

(10) 拙稿「大宝二年春の詩宴」〔鎌倉女子大学紀要〕第一七号、二〇一〇年。

(11) 上田正昭『藤原不比等』（朝日新聞社、一九八六年）。

(12) 木本好信『律令貴族と政争』（塙書房、二〇〇一年）。

(13) 拙稿「藤原不比等の詩苑」〔埼玉大学紀要（人文科学篇）〕第二十三卷、一九七五年。

(14) 註(10) 前掲論文。

(15) この問題については、たとえば寺崎保広『長屋王』（吉川弘文館、一九九九年）の「長屋王の生年」という項において紹介・整理が行われている。

(16) 寺崎保広『長屋王』（吉川弘文館、一九九九年）。

(17) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』上（塙書房、一九六八年）四四七頁。

(18) この「鉦鼓」は、単なる「たたきがねと太鼓」ではなく、舞楽に用いる打楽器の類を指しているであろう。

(19) 加藤有子『『残岸』考―大伴旅人の漢詩をめぐる―』（『懷風藻研究』創刊号、一九九七年）。

(20) 小島憲之校注『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』日本古典文学大系69（岩波書店、一九六四年）の頭注。

（二〇一二年十月一日受稿）

The Poem of “Ganjitsu” (New Year’s Day) in “Kwaifuso”

Seihiro Yamano

Abstract

In *Kwaifuso*, two poems titled “Ganjitsu” (New Year’s Day) were composed by Fujiwarano Fuhito and Nagayaou. However, further research revealed another poem about *ganjitsu*, titled “Shoshunjen” (Participating in a Banquet in January), composed by Ootomono Tabito. These three poems were found to have been composed in January in the third and eighth years of the Wado era.

Keywords: the poem “Ganjitsu” (New Year’s Day) by Fujiwarano Fuhito, the poem “Ganjitsunoen” (The Banquet on New Year’s Day) by Nagayaou, the poem “Shoshunjen” (Participating in a Banquet in January) by Ootomono Tabito